

お人好し転生鍛冶師は
異世界で幸せを掴みます！

ものづくりチートで
らくらく転生ライフ

著 かむら

Illustration: リーん



領主の弟であり、
冒険者パーティのリーダー。
注意深い性格。

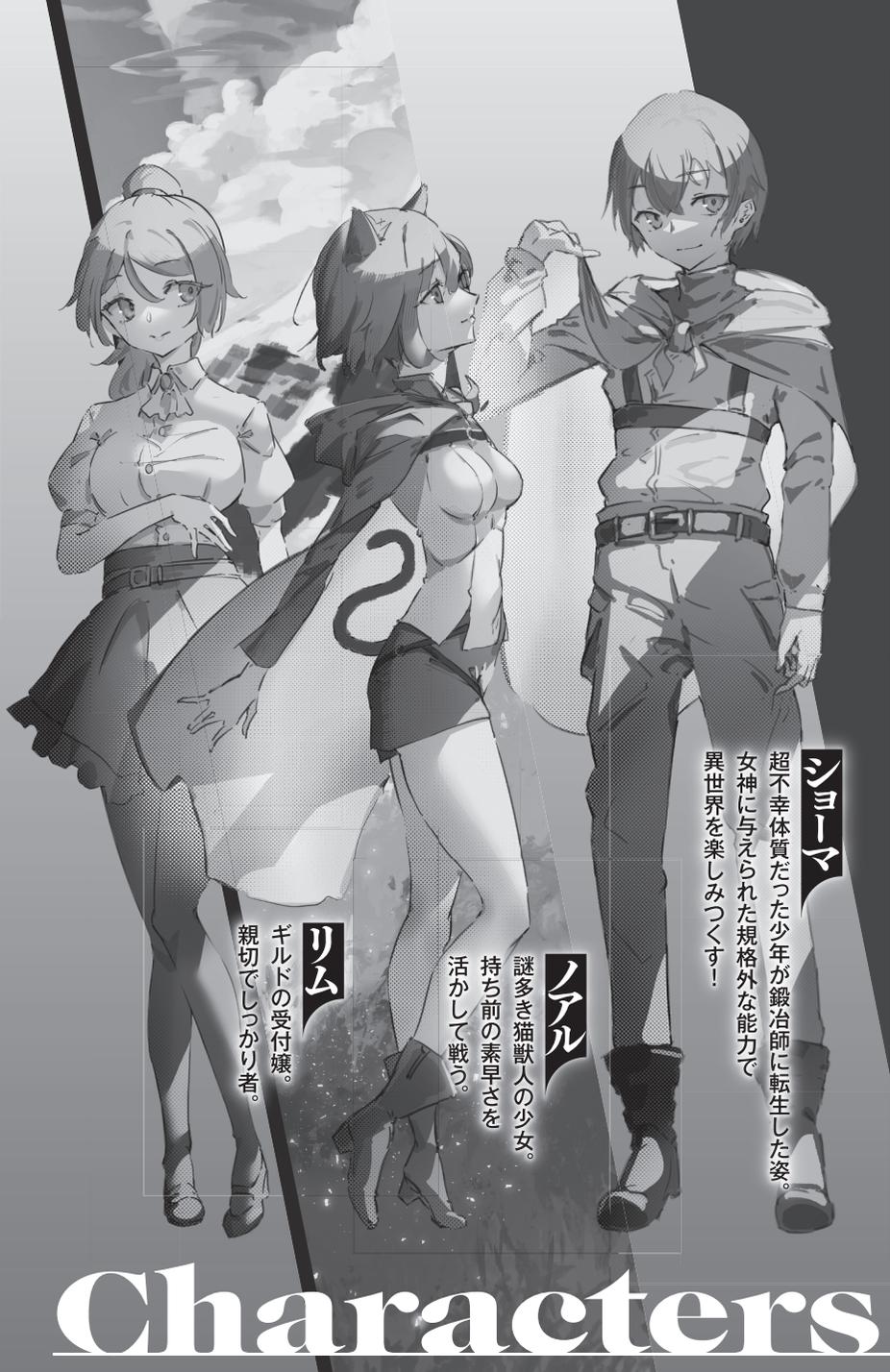
クラウス

高い実力を持つ魔導師。
ゲイルとは衝突しがち。

ミアンナ

シヨーマが異世界で初めて
出会った冒険者。
がさつだが情に厚い。

ゲイル



ギルドの受付嬢。
親切でしっかり者。

リム

謎多き猫獣人の少女。
持ち前の素早さを
活かして戦う。

ノエル

超不幸体質だった少年が鍛冶師に転生した姿。
女神に与えられた規格外な能力で
異世界を楽しみつくす！

シヨーマ

Characters

はじまり

都会の喧騒とは無縁の山の麓にある田舎町。

高校三年生の僕、剣持匠真は、そんな場所で一人暮らしをしていた。

両親は、どちらもない。

母さんは僕を産んだ時に亡くなり、僕を数年前まで男手ひとつで育ててくれた父さんは刀匠……
分かりやすく言うと、鍛冶師だったのだが、無理を重ねていたのか、死んでしまったのだ。

そんな父さんの仕事ぶりが好きで、僕はよく仕事場に行っては父さんの仕事を見学していた。

その影響で僕はちよつとした武器マニアになった。

剣や槍や斧、そして銃といった武器だけではなく、鎧や甲冑などの防具に至るまで。

それも実在していたものから空想上のものまで、その武器がどんな使い方をされてきたかを調べて、知識としてインプットするのが好きなのだ。

僕をそんな趣味に目覚めさせた父さんだが、かなり無口で、あまり余計なことを話さない人だった。

でも、僕が中学生ぐらいの頃、嫌なことでもあったのか、普段あまり酒を飲まない父が少し酔っ払って、やけに饒舌になったことがあった。

その時に、母さんとの出会いや結婚するに至った経緯などを、数少ない夫婦二人の写真を見せながら語ってくれた。

写真に写っていた母さんはどんな時も優しく微笑んでいて、実の子ども故の鼻眉目かもしれないが、とても綺麗な人だと思ったことを覚えている。

そんな母さんの話をしている中で一番印象に残ったことは、思い出話をする途中で見せた父さんの、優しさで悲しさを混ぜたような、なんとも言えない表情。

十数年共に過ごしていたけど、そんな表情は初めて見た。

そして、父さんは『母さんはお前を産んだ時、産まれてきてくれてありがとう。愛している——』そう言っていた。その気持ちは俺も同じだ。ありがとう、愛している』と言ってくれた。

酒の力もあったのかもしれないが、そんな真つ直ぐで偽りのない気持ちに心ええたくなった僕も『父さんには感謝してる。もちろん母さんにも。産んでくれて、そしてここまで育ててくれてありがとう。二人の子で僕は幸せだよ』と返した。

その言葉を受けた父さんは『そうか……』とだけ言い、飲んでいたものを片付け、さっさと寝てしまった。

翌朝、起きた時にいつも通り『おはよう』と声をかけると父さんは『おう』という素つ気ない返事のあとに『仕事をしてくる』と告げ、出かけていった。

その後ろ姿がいつもよりご機嫌に見えたのは、昨日のことを覚えていたからだろうか。

しかしその一年後、父さんは仕事場で倒れた。

死因はあとから聞いたが、突発的な心臓発作だったそうだ。

父さんの葬式には沢山の職人仲間や身内が集まった。

無口で、お世辞にも愛想がよいとは言えない人だったが、その死を悲しむ大勢の人を見て、父さんは僕だけではなく多くの人に愛されていたのだと、悲しみに沈みながらも思い知らされた。

そうして葬式などが終わり、今後どうするか祖父母や叔父、叔母と話し合うことに。その結果、高校受験を既に終えており、住んでいた家から通う高校が近かったため、一人暮らしを始めることになった。

そんな境遇の僕は、不幸体質だった。それも、かなり深刻な。

マンシヨンの下を歩いていて、花瓶をはじめとした物が落ちてくるなんてことはしょっちゅうだったし、学内でボールが顔面目掛けて飛んでくるのも一度や二度ではなかった。

そしてその体質は、父さんが亡くなった頃から更にひどくなる。

(これが走馬灯^{そうまどう}ってやつなのか……?)

痛みは感じない。でも、ここで自分は死ぬんだということは確信出来た。

死ぬと分かつてでも不思議と悲しみはなかった。

トラックに飛び込んだ自分の判断に後悔^{こうかい}もない。

ただ、少し申し訳なくは思う。

父さんが死んだ時、心配してくれた祖父母や叔父、叔母。

他にも、沢山の職人仲間の人達が気遣^{きづか}ってくれたのに。

そして、何よりも、父さんや母さんが愛してくれたこの命を、こんなにも早く終わらせてしまうなんて。

(天国に行ったら二人に会えるのかな……会ったら謝^{あやま}らないとなあ……母さんは写真の中と同じ微笑みを浮かべながら、許してくれるかな？ 父さんは……ちよつと怒るかもな。ただ、二人に会ったら改めて感謝を伝えよう……)

そこまで考えたところで、僕の意識は途切れた。

1 女神^{めがみ}の謝罪と真実

「ん……?? ここは……??」

目を開けると、僕は綺麗な空間にいた。

三百六十度キラキラと輝^{かがや}く大小さまざまな星のようなものが、淡^{あわ}い黄色や水色、緑^{みどり}色が混じったような色の空に浮かんでいる。

「たしか僕はトラックに撥^はねられて……」

そう、僕はたしかに死んだと思う。

その時の記憶^{きおく}も鮮明^{せんめい}にある。

じゃあ、ここはどこなんだろうか？

死んだあとに来ている……ということは天国かもしれない。

「……こんなポップなカラーした地獄^{じじく}はあってほしくないし」

苦笑しながらそんなことを一人呟^{つぶや}いていると、突如^{とつじゆ}空間に変化が起きた。

空間全体がチカチカと明滅^{めいめつ}したかと思うと、空に浮かんでいた星々^{ほしほし}が僕の目の前に集まっていき、

一塊ひとかけになり、先程とは比べものにならないほど輝き始めた。

「なんだなんだ!？」

星の光がようやく収まったかと思うと、僕の目の前にはこの世のものとは思えない程美しい女の人が立っていた。

「はじめまして、剣持匠真さん」

その女の人は、呆気あぢけにとられて僕に向かって話しかけてきた。

教えたこともない、僕の名前を口にして。

そのまま、その女の人はゆつくりと近づいてくる。

一歩一歩ゆつくりと地面を踏みしめながら近づいてくるその姿を見ながらも、そもそもこの空間に地面があったんだとか、なんで近づいてくるんだとか色々思う。

でも女の人の持つ形容けいようしがたい雰囲気ふんいきに呑まれ、ただただその姿を眺ながめることしか出来なかった。女の人はどんどん近づいてきて、やがて僕の目の前で止まった。

そして、僕の目を見つめたと思ったら……

「申し訳ありませんでしたー……っつっつ!!」

見たこともないくらい、綺麗な土下座どげざをかましてきた。

「はい？」

呆気にとられすぎて、思わず変な声が出てしまった。
わけが分からない。

なんで僕はこの絶世ぜっせの美女に土下座をされているんだろうか。
そもそもこの人には、会ったことすらないのに。

「えーっと……とりあえず、頭を上げてくれませんか？」
何かを言わないと永遠にそのままいそうなので、とりあえずそう声をかけてみた。

僕の声聞いて頭を上げた女の人は、瞳ひとみをうるうるさせてこちらを見てくる。
それを見ると、なんとなく怒られてしゅんとした子犬の顔が頭の中に浮かんだ。

「えっと……沢山聞きたいことがあるんですけど、聞いても大丈夫ですかね？」

「はい……私が答えられることだったらなんでもお答えします。時間もいくらでもあるので気にせず質問してください……それに、私みたいなやつに敬語なども使わなくて大丈夫です……」

申し訳なさそうにしながら、女の人はそう答えた。

一応、会話にはなりそうだ。

初対面だし敬語で話す方が楽だとは思ったが、今の状況を把握はあくすることが先決なので、少し碎くだけた話し方にする。

「……分かった。まずは僕のことを聞かせてもらいたい。僕は死んだのかな？ たしか僕は女の子

を助けようとしてトラックに撥ねられた気がするんだけど……」

「はい。匠真さんはトラックに撥ねられ、命を失いました。本当に申し訳ありません……」
なぜこの女の人が再び謝ってくるのだろう。

僕はビシッと人差し指を女の人に向ける。

「そう、それ！　なんで僕はあなたに謝られてるの？　さつき初めて会ったのに、いきなり土下座で謝られる覚えなんてないよ……」

「そうですね、まずはそれについて説明しましょう。その前に私の立場をお伝えしておきます」
この女の人の立場？

なんだろうか？

「私は運命を司る女神、フォルティと申します」

「はい？」

女神？

たしかにこの世のものとは思えない程、綺麗な人ではあるが……女神？

「女神……ですか？」

「はい！　女神です」

僕は一瞬フリーズしたものの、なんとか口を開く。

「えっと……それで、女神様がなんでいきなり僕に謝っているの？」

「女神様なんて……やめてください……私はあなたを酷い目に遭わせた駄女神ですから……」
再びどんよりとした雰囲気です。そう言ってくる、自称女神様。

話が進まないんだが……

「ひとまず呼び方は置いておいて、理由を説明してほしいんだけど？」

「そうですね……匠真さんは自分が不幸だと思っただけではありませんか？」

嫌という程ある。

ちよっとしたことでも怪我したり、道を歩いているだけでトラブルに巻き込まれたりなんてザラだったわけだし。

「心当たりは沢山ありますかな」

「ですよね……私が謝りたいのはそこなんです」

「どういうこと？」

「実は……匠真さんが不幸だったのは私のせいなんです」
んん？

僕の不幸と目の前の女神——フォルティに何の関係があるんだ？

「最初に言った通り、私は運命を司る女神です。言い換えれば、匠真さんが生きていた世界の人々

の運命を管理する者でした」

「世界の人々って……全ての人を管理しているってこと？」

「はい、その通りです。ちなみに私が管理しているのは匠真さんが生きていた世界だけではありません」

なんかスケール大きすぎて実感が湧かないな。

ラノベや空想の中の話みたいだ。

「匠真さんほど不幸な人間が生まれてしまうなんて、本当だったらあり得ません。本来、人間の幸運値は大きな差が出ないように振り分けられますから」

「そういうもののなの？」

「少なくとも私が管理している世界はそうでした」

幸運の量を操作出来るのか……

とんでもないな。

正直思考が追いついていないが、嘘をついているようには見えない。

「その運の分配も、世界を管理するというのはとても大変なので、私のような管理する立場にある神達の負担を減らすために神位の低い神——我々は三等神と呼んでいるのですが——その者達に基本的には任せ、私がそれらの帳尻を合わせる形で世界の管理を行っているんです」

ふむ、フォルティが会社の社長で、その三等神が社員みたいな感じかな？

まだ働いたことがないから、正しいとえかは分からないけど。

「しかし、匠真さんが生まれる少し前に前任の管理者の神位が上がって、新しく三等神が上がったばかりの新神が世界の担当になってしまったんです。ちなみに、問題を起こさずに世界を数千年——遅くとも数万年管理することで三等神は二等神になります」

「……桁が違いすぎて想像つかないんだけど」

「案外すぐですよ？」

咄嗟に年齢を聞きそうになったが、やめておく。

神とはいえ女性だしね。その辺の価値観が僕らと同じかは分からないけど。

フォルティは再度口を開く。

「で、その後任の新神が、よりよい世界を創って早く神位を上げようと、世を引っ張っていく素質がある人間に、他の人の幸運を渡しちゃったんです……最低限生きていけるだけの幸運を残してほとんど丸ごと。で、渡す幸運量は多い方がいいだろうってことで、他の人と比べて多くの幸運値を持っていた匠真さんが犠牲に……生まれた人間の幸運量を大きく調整するのは不可能で……それで……」

フォルティが黙りこくってしまったので、僕は聞く。

「その幸運を沢山持っていた人間って……」

「はい……匠真さんのことです……」

フォルティは申し訳なさを前面に出しながらそう告げた。なるほど、だからフォルティはいきなり謝ってきたのか。

それにしても、幸運が奪うばわれていたとは……

それを聞くと今までの不幸は納得なちどく出来るな。

ん……？

それなら、もしかして……

「フォルティ？ 何点か聞きたいんだけど」

「はい、なんでも聞いてください！」

「幸運が奪われたのって僕が生まれた直後ってことで大丈夫？」

「えーっと、はい、そうですね。匠真さんが生まれてすぐ幸運が奪われたみたいです」

「それで幸運がないままずっと生きてきた？」

「はい……トラックに撥ねられて亡くなったことも少なからずその影響があったと思います」

今の答えを聞いて、少し確信が深まった。

僕が一番聞きたいことについての確信が。

「これが一番疑問に思ったことなんだけど……もしかして、父さんと母さんが死んだのって、僕のせいかな……？」

その質問を聞いた瞬間、フォルティの顔が明らかに歪ゆがんだ。

まるで、それが答えですと言わんばかりに。

「……そっか」

「……………はい」

消え入りそうな声で、フォルティは肯定した。

両親が死んだのが僕のせいだと分かった途端とたん、言い表しようのない感情が頭の中を駆け巡った。

自分に対する怒りや悲しみ、両親に対する申し訳なさ、その他様々な醜みにくい感情が浮かんでは、頭の中をめちゃくちゃにかき乱してくる。

僕みたいな存在が生きていてよかったのか？

そこにいるだけで、周りにも不幸を振りまく存在が。

僕のせいで両親が死んだのならば、いつそのこと僕なんて生まれなければ――

「……優しいんですね、匠真さんは」

自己嫌悪じこけんおに浸ひたっていると、静かな、それでいて優しい声色こゝろいろでフォルティが言った。

優しい？

僕が？

こんな醜い感情に支配されている僕のどこに優しさなんて感じられたんだろう。

「……匠真さんが死んだ原因が自分自身の不幸によるものだと私が告げた時、どこか諦めというか仕方のないことだというような顔をされていて、後悔がなさそうでした。しかし、自分の不幸のせいで自分の周りの人が不幸になったと聞いた途端、もの凄くお怒りになりましたよね」

「……顔に出てる？」

「はい、それはもう……ちょっと怖いくらいでした」

「……すみませんでした」

申し訳なく思わず丁寧ていねいに謝ってしまった。

怖がらせるつもりはなかったんだけどな……

「いいいえ、いいんです。その怒りはもつともだと思えます。本当のことを言うと、罵ののられたりなんなら殴なぐられたりすることすら覚悟かくごしていました」

「……そんなことしないよ」

「でしたね。それを含めて優しいと感じたんです」

初対面の美女を殴れる男などそう思うと思うのだが。

けど、フォルティのおかげで少し落ち着くことが出来た。

「落ち着きましたか？」

「……うん、ありがとうフォルティ」

「いいいえ。元はと言えば私達神側に問題がありましたから……それで、これからのことに関して匠真さんにいくつか提案があります。一つ目は匠真さんが望のぞむのならば、という前提付きのご提案なんですけど……」

フォルティはそこで言葉を区切り、僕の目をまっすぐ見つめてくる。

「ご両親に会って、話をしませんか？」

とんでもない提案だった。

しかし、それは願ねがってもないことでもある。

「……そんなことが出来るの？」

「本来出来ないのですが、今回の匠真さんの被害は神側の不手際ふてぎわによるもの。他の神にも相談・協力してもらって、限られた時間——匠真さんの時間感覚で言うところは一時間程ですが——話すことが可能になったんです」

「一時間か……長いような短いような時間だね」

「これでもかなり頑張りがんばりました。匠真さんの両親の魂たましいを自我と記憶を保ったまま、更に話せるように固定するには私と同等の立場の神の協力が必要で。協力してくれた子曰いわく、それ以上魂に手を

加えちゃうと今、後の転生に支障が出てしまうので、一時間が限度なんだそうです」

そう言われると納得するしかない。

一時間でも会えることに感謝しないとな。

そういえば、さっきから気になっていただけ……

「フォルティって今までの話を聞いた感じだと結構位の高い神なの？」

「はい。私は一等神ではなくて最高神ですよ」

「へ？ それって——」

「一番上の神位です。一等神の上になりますね。同等の立場の神は現在は数柱しかおりません」

……なんてこった。

予想の斜め上すぎる。

「最高神って……そんな立場の神が僕なんか土下座なんかしちゃってよかったの？」

「んー、よくはないかもしれませんがねー。見られたら下の位の神々に陰口を叩かれるでしょうね。

最高神としての自覚がないって」

「いやいや！ そんな呑気な!？」

「いいんです。匠真さんが不幸になってしまった責任は私達にあるのですから。ここで誠意を見せて謝らないで、何が最高神ですか」

「そうか……分かった。改めて、謝罪を受け入れるよ。だからもう土下座とかはやめてね。最高神から土下座されるなんて、心臓に悪すぎるよ」

「分かりました。ありがとうございます。それで、どうしますか？ ご両親とお話しされますか？」

……そうだ、脱線してしまっただけで、それが本題だった。

僕の答えは話を聞いた時から決まっている。

トラックに撥ねられた時に思った、天国で父さんと母さんに謝りたいという願いを実行出来る思いがないチャンスをわざわざふいにするわけにはいかない。

「会えるのならば、会わせてほしい。会って伝えたいこと、聞きたいことが沢山あるんだ」

「分かりました。では、こちらに来てください」

言われた通りフォルティの近くに行くと、フォルティが両手を繋ぐよう促してきたので、その手を取る。

……手を繋ぐ際、ちよつとドキドキしてしまったのは許してほしい。

「では、匠真さんのお父様とお母様が待っている空間に飛びます。私はそこに着いたら離脱するので、私のことは気にせずお話ししてください。時間になったらまた迎えに行くので待っていてくださいね」

そう言うとフォルティは目を閉じる。

そして、フォルティが再び目を開いた時——空間が光に包まれた。

気が付くと僕は、自分の部屋の中にいた。

「ここは？」

一瞬全てが嘘だったんじゃないかとすら思ったが、返ってきたフォルティの声がそれを否定する。

「匠真さんと手を繋いだ時に、少し記憶を覗かせてもらいました。両親と話すのならばやはり慣れ親しんだ自宅が一番かなと思ったので、似たような空間を再現させてもらったんです」

「なるほど……たしかにそうかもね。それで、父さんと母さんは……？」

「リビングの方にいると思います。それでは、私は別のところで待っています。先に言った通り、一時間後に迎えに来ますね」

フォルティはそう言うのと、シュンツと一瞬でどこかに消えてしまった。

「リビングの方にいるって言ってたな……」

フォルティの言葉を信じて、僕は自室を出てリビングへ向かう。

階段を降り、廊下を抜け、リビングの扉の前に立つ。

生まれてから何度も歩いたルートを通して、見慣れたはずの扉の前に来ただけ。

そう自分に言い聞かせても尚、なぜだか開けるのを躊躇ってしまう。

だが、一時間というタイムリミットを考えると、ずっとそうしているわけにもいかない。

少し息を吐いて、意を決した僕は、扉をゆっくりと開いた。

見慣れたリビングの真ん中には、三年振りに会う父さんと、いつか見た写真のままの微笑みでこちらを見つめる、母さんがいた。

「おう、おかえり」

「おかえりなさい、匠真」

二人を見た途端、色々なものが込み上げてきた。

父さんと……また会うことが出来た。

母さんと……ようやく会えた。

「父さん……母さん……その……」

言葉が、出てこない。

二人に会えたら、これを言おう、あれを言おうといくつも考えていた。

伝えたいことだって沢山あった。

なのに……何も言葉にならない。

そんな風に半ばパニックになっていた僕に、父がいつも通りの少しぶっきらぼうな口調で言う。

「おいこら、匠真。おかえりって言ったのに、返事はないのか？」

「もう、匠^{しやう}さんだったら、そんな強い口調で言わなくてもいいじゃない。匠^{しやう}真^{まこと}が困^{まど}ってるわよ？」
「……うるせえ」

初めて見る、両親同士の会話。

父さんと母さんの関係性が少し分かった気がして、自然に笑みがこぼれた。

僕は、何を迷^{まよ}っていたんだろう。

家に帰^{かえ}って、家族に会^あったら、言うことなんて一つじゃないか。

「……ただいま。父さん、母さん」

僕がそう言うのと、二人共笑^{わら}って――

「おかえり、匠^{しやう}真^{まこと}」

その声には、深い愛情がこもっていた。

瞬間、僕の目から涙^{なみだ}が溢^{あふ}れてくる。

ああ、帰^{かえ}ってきたんだ……

*

「落ち着いたか？」

「うん……ありがとう」

「ふふ、いいのよ」

僕が泣^ないている間、父さんと母さんは無言で僕の頭や背中を撫^なでてくれていた。

優しい表情で。

母さんが父さんの方を見て、やけにニコニコしている。

「……なんだ？」

「いえいえ、なんでもありませんよ？ ただ、私がない間、しっかりお父さんしていたんだな、

と思っただけで」

「うるせえよ」

そんな二人のやり取りを見て、僕は言う。

「二人共、仲いいよね」

「あら、そう見える？ 息子に言^いわれると、ちょっと照^てれ臭^{くさ}いわね」

「……………」

僕がそう言うのと、母さんはニコニコとしながらちよつと恥^はずかしそうにして、父さんは照れ隠^{かく}し
なのかそっぽを向^むいてしまった。

「それで……父さん、母さん。二人に会^あったら、まずは謝^{あやま}りたいと思^{おも}ってたんだ。僕のせいで、関

係ない二人が死んでしまうことになってしまつて、本当にご——痛つたあ!!」

「バカ言つてんじゃねえよ」

謝ろうと頭を下げようとしたところで、父さんがデコピンしてきた。

これ、久しぶりに食らつた……!!

小さい頃、僕が悪いことをした時には、決まつて父さんにデコピンされて大泣きした。そしてそのあとに頭を撫でられて笑つて許されたんだ。

だが、今はそういうタイミングじゃなくない!?

そう思い、僕は思わずジト目になつて父さんを見つめた。

でも父さんは「ふん」と鼻を鳴らして僕を見ている。

なんで、デコピンされたんだらうか?

僕は謝ろうとしただけなのに。

すると、母さんが言う。

「そうよ、匠真。謝ることなんて何も無いの。お父さんとお母さんは匠真を産んだことを後悔してないし、私達が死ぬつて分かつていても匠真を産んだわよ?」

母さんの言葉に絶句する。

なんで、そんな風に言えるの?

「親だからだよ」

僕の表情から、何を考えているか察したのだらう。

父さんはそう言つて、続ける。

「親つーのはそういうもんなんだ。子供のためだつたらなんだつて出来る。それは……あー、

その、なんだ……」

「ふふ、愛してるからよ」

「……そう、それだ。だから、謝んじゃねえよ。謝られたら、お前を産んだ選択を否定されてるみてえじゃねえか」

そうぶつきらぼうに言い放つ父さんの言葉は口調に反してどこまでも温かく、胸の中にストンと落ちた。

母さんの方を見ると、うんうんと頷いている。

「ほんとにご……」

「謝んなつてんだらうが」

「……はい」

思わずまた謝つてしまひそうになつたが、その言葉をなんとか呑み込んで頭を上げた。

そして、父さんと母さんの顔を真っ直ぐ見つめて、さっきみたいな悲しみや申し訳なさではなく、

とびつきりの感謝と愛を込めて――

「父さん、母さん、本当に……ありがとう。僕を産んでくれて、育ててくれてありがとう。僕は二人の子供で幸せだよ」

そう、思いを告げた。

「ふふ、いいのよ。こちらこそ、生まれてきてくれてありがとうね」

「……ああ」

母さんは、とても嬉しそうな表情でそんな言葉を返してくれた。

その表情は愛に満ち溢れ、とても魅力的だ。

父さんは……顔を背けてしまったので表情が読み取れない。

ただ、顔を背ける直前、目尻に光るものが見えた気がする。

指摘すると怒られそうなので、言わないけど。

……少しは親孝行出来ただろうか？

生前に何も返すことは出来なかったけど、今の言葉を伝えられただけでも、少しは両親にももらったものを返すことが出来たのかも。

両親を見て、僕はそんなことを思った。

*

改めて、色々と気になったことを聞いてみる。

「そういえば母さん、よく僕が息子だつてすぐ分かったね？ 僕がこの部屋に入ってきた時、確信持ってたみたいだけど」

「んー、話すとき長くなるんだけど……そうね、匠真はここに来る前に女神さんに会った？」

「フォルティを知っているの？」

「知っているも何も、私もお父さんもあの女神さんに会っているのよ。ね、あなた？」

「ああ、会ったな。んで、俺の時も母さんの時も対面した瞬間、土下座されたんだよな」

あー、父さんも母さんもフォルティに土下座されたのか。

「それでね、匠真の不幸体質のことを教えてもらったの。それと同時に『お詫びとして、匠真さんが死んでしまった時に、会ってお話しする機会を設けよう』って言われたの」

「……そうだったんだ」

「もちろんお願いしますって即答したわ。もう話すことは叶わないと思ってたから、いてもたってもいられなかった。そこからは、色々話を聞いて、その時が来るまで備えようって話になっていた

「ただけど……」

「けど？」

「俺が死んじまったんだよな」

父さんの言葉に、母さんが頷く。

「そうなのよ。今まではお父さんが匠真の近くにいたから安心していただけ、お父さんが死んでしまつて、とても不安になつたわ。それで、私達二人で女神さんに、どうにかして匠真のことは見守らせてくれないかって頼んでみたら、凄く悩んだ結果、最終的に女神さんと一緒に匠真の生活を見せてもらえることになつたのよ。だから、匠真がどんな顔で、どんな性格なのかは知つていたの」

「そうだったんだ」

「そう。だから、匠真が最後に女の子を庇つてトラックに撥ねられたところも見ていたわ。……その瞬間を見た時は、死んでいるのに心臓が止まるかと思つた」

そんなところまで見られていたのか。

たしかに、自分の子供が死ぬところなんて見たくないに決まつている。

あ、そういえば……！

「もしかして、その場面を見てたなら、あの女の子がどうなつたか分かつたりする？」

そう、あの女の子のことだ。

庇つた方がいいが、その後どうなつたのかは死んでしまつた今、分からない。

「ああ、あの女の子なら無事だ。流石に骨の何本かにヒビが入つたりしたみたいだが、命に別状はないみたいだ。匠真がしっかりと抱え込んで庇つていたおかげでな」

「そっか、助かつたんだ。それならよかつた……」

「ついでに言つておくと、匠真の葬式にも来てたぜ。お前の遺影の前で、泣きながら謝つてたよ。それで、最後は『私のことを守つてくれてありがとう。お兄さんの分も精一杯生きていきます』つて言つてたぜ」

そう言つてもらえると、助けた甲斐があつたかな？

まあ、僕のこととは忘れてくれていいんだけど、そうもいかないならせめて、あの子が強く生きられるように願うことにしよう。

「匠真が死んでしまつたのはとても悲しかつたけど、あなたのおかげで一つの命が救われたつて思うと、少し誇らしく思うわ。ほんと、自分より他人を助けようとするなんて、誰に似たのやら」

そう言つて母さんは、クスクス笑いながら父さんの方を見た。

父さんはそれを受け、明後日の方向を向いた。

「どういふこと？」

「ふふっ、お父さんも昔、私が高校生の頃にガラの悪い人達に絡まれて困つていたところを助けて

くれてね。相手は三人くらいだったかしら？」

「……四人だ」

「そうそう。それで、ガラの悪い人達に向かって『困っているから離してやれ』って言ってくれたのよ」

「それで、どうなったの？」

「もちろん、向こうは拒んだわ。人数も多いし負けるわけがないと思ったんでしょね。そこからはもう、大喧嘩よ」

「え、四対一で？ 大丈夫だったの、父さん？」

父さんに視線を向けると、気まずそうな答えが返ってくる。

「……まあ、一応それなりに武道の経験があったからな。お前も行ってた、道場の師範代の爺さんに色々仕込まれていたんだよ」

あー、あのお爺さんか。

僕が行っていたのは父さんが死んでしまった時までだったけど、結局、あのお爺さんには一撃も入れることは出来なかったな。

柔道とか剣道とか、色んな武道を教えてもらったっけ。

「とはいえ、流石に武道をやっていたといっても四対一だったから、不良達が逃げていく頃にはお

父さんもポロポロになってね。それでも、私のことを気遣って『怪我はないか？』って真っ先に言ってくれたの。そこで、私はお父さんに惚れちゃった」

「それは、たしかにカッコいいね」

「でしょー？ それでその後、平気そうな顔してたけど、やっぱりキツかったみたいで、お父さん倒れちゃってね。私の実家の近くだったからそこに運んで介抱したの。それで、目を覚ましたお父さんはお礼だけ言って、さっさと帰ろうとした。でも、私は呼び止めてこう言ったの『私を助けてくれたあなたに、恋をしてしまいました。連絡先を教えてくださいませんか？』ってね」

おお、なんというか、行動が早いな。

でも、会ったばかりの人だし、そこで別れてしまったら、二度と会えないかもしれないって考えると、その行動も理解出来るかも？

「父さんは、どうしたの？」

黙ったままの父さんに話を振ってみた。

「……最初は断った。俺みたいなつまらん男を好きになってもいいことはない。君にはもっとうい人があるってな」

「そしたら？」

「怒られた」

「へ？」

「勝手に私の気持ちを否定しないでください。私があなたを好きになったのは間違いないことで、私にとつていい人はあなたです。それに、あなたがつまらないかどうかとも私が決めること。なので、連絡先を教えてください。あなたをもっと知りたいんです」ってな」

母さん……凄いな。

「それで、お父さんも折れたみたいで、連絡先を教えてください。それから、私のことを好きになつてもらいたくて猛アタックしたわ。告白も私から。改めて付き合ってくださいって言ったら、オーケーしてくれたの。それから少しして私達は高校を卒業した。お父さんはすぐ、実家の仕事を継いで、私はお父さんを支えたくて大学に行つて、色んなことを学んだわ。その後、私が大学を卒業して二年くらいした時に、お父さんから、プロポーズしてくれたの」

「父さんからだったんだ？」

「……最後まで母さんに言わせてたら情けないだろ」

「それでね、お父さんのプロポーズの言葉がね……」

「オイ。そこまでいいだろ」

「え、匠真にも聞いてもらいましょうよ」

「ダメだ」

「なんでよー？」

「……二人だけの秘密つてことでいいだろ」

「それもあるかもしれないけど、一番は恥ずかしいからでしょ？」

「……チツ」

父さんが不機嫌そうに舌打ちする。

「まあ、二人だけの秘密ということにしましょうか。……とてもいい言葉だったのに、匠真に教えられなくて残念だわ」

「はは……いいよ、いいよ。ここまでの話で父さんと母さんの馴れ初めは十分分かったから」

これ以上聞いたら、本当にお父さんが怒りそうだったからこれ以上深堀りするのはやめておいた。

「匠真も好きな人が出来たら、自分から好きって言うのよ？ 出来ればその子が喜びそうな言葉でね！ 女の子はそういうことを好きな人に言われたら本当に嬉しいんだから」

「いや、母さん。僕、もう死んでるんだけど？」

これからそんな機会なんて永遠に訪れるわけがない。

当然の如くそう思っていたのだけど……

「え？ ……あ、もしかして、まだ聞いてないのかしら？」

「そうみたいだな」

「ん？ どういうこと？」

「うーん、なんでもないわ！ でも一つ言っておくなら、匠真の人生はこれで終わりじゃないの。それ以外については女神さんが話すと思うし、私達は余計なことは言わない方がいいわね」

「そうだな」

「なんか、二人で納得してしまった。」

「なんなんだろうか？」

2 別れとこれから

ピーーーーーッ！

「ん？ 何、この音？」

突然、リビングにタイマー音のようなものが鳴り響いた。

「これは、もうすぐで一時間ですよっていうお知らせね。女神さんが言ってたわ」
僕の疑問に母さんが答えてくれる。

「そうか……話に夢中で忘れかけていたな。」

もともと、「両親に会えるのは一時間が限界なんだった。」

そのことを思い出した途端、先程までは晴^はれやかな気持ちだったのに、悲しくて寂しい気持ちになってしまう。

二人と、もつと話していたい。

初めて家族三人での時間を過ごして、僕は初めて両親の愛を知った。

その時間がもう終わってしまうと考えると、どうしようもなく悲しい気持ちになってくる。

そう思っていると、父さんが少し笑いながら僕の頭を撫でてきた。

「そんな顔すんじゃねえよ」

「そうよ。もう二度と会えないと思っていたのに、こんなに沢山話せたんだから」
母さんもそう言って、僕の頭を撫でてくれた。

二人は、笑っている。

僕との再会を本当に喜んでるのが、その表情からありありと伝わってきた。

その時間がほんのひと時であったとしても。

……そうだ、折角会えたのに、最後に二人を不安にさせるわけにはいかない。

そう思った僕は、顔を上げて二人をしっかりと見据え、改めて思いをぶつけることにした。

「父さん、母さん、さっきも言ったけど、ありがとう。本当に感謝してる。産んでくれたこと、育

ててくれたこと、見守っていてくれたこと。そして、どこまでも、深く、深く、愛してくれてありがとう。僕も、父さんと母さんのことが……大好きです……！二人の……子供で僕は、本当に……ほん、とに……幸せです……！」

僕はなんとか二人にそう告げた。

最後の方は涙を堪えられなくて、途切れ途切れになってしまったけど。

ただ、この涙は別れの悲しみから来るものじゃなく、二人が、沢山の愛をくれたことへの感謝から来るものだ。

もう悲しくはない。

あるのは、二人への感謝だけ。

母さんも、僕の言葉を聞いて、涙を流していた。

そしてそのまま、しっかりと抱きしめてくれる。

父さんは少し目を潤ませながら、僕のことを、母さんごと優しく抱きしめた。

少しの間、僕達はそのままだった。

言葉すらいらぬ、ただただ家族同士の愛を感じられる時間を全力で享受したんだ。

やがて、空間が徐々に光に包まれ、リビングの風景が少しずつ薄れていく。

両親の体も少しずつ透けていく。

約束の時間が終わろうとしていた。

父さんと母さんは別れを惜しむように、僕の体からゆっくりと体を離れた。

そして、父さんが口を開く。

「匠真。さっき言ってくれたこと、とても、とても嬉しかった。こちらこそありがとう。母さんが死んで、二人で暮らしていた頃、色々と家のことをやってくれて、感謝している。お前は俺達にもらってばかりだと思っていたみたいだが、そんなことはない。俺も母さんも、お前には沢山のものをもらったよ。本当にありがとう」

父さんは男の僕でも見惚れるような、かっこいい大人の笑みを浮かべながら、更に言葉を続ける。「この先、何があってもお前は自分の意思で生きればいい。お前がしっかりと悩み、考えて選べば、それがお前にとって、一番いい選択になるはずだ。だから、強く生きろよ。これからの匠真の未来がどこまでも幸せであることを、願っている」

父さんのその言葉に、僕は涙を流しながら強く頷いた。

「私も、お父さんと同じ気持ちよ。本当にありがとう。匠真が私のお腹の中にいるって分かった時は本当に嬉しかったの。生まれてくる時が本当に楽しみでしょうがなかった。病院で無事に生まれて、声を聞いて、抱きしめた時のことは今でも鮮明に憶えているわ」



母さんは昔を懐かしむような表情でそんな風に言ってくれた。

「一緒に生きることは出来なかったけど、ここから匠真を見守っていた時に、強く生きている様子を見て、とても嬉しかった。私達の子として生まれてきてくれてありがとう。私達はいつまでも、匠真の心の中にいる。そして、見守ってるから幸せになりなさい。匠真の生きる世界の全てに、幸せが溢れることを願っているわ」

母さんも、父さんと同じように優しさと子を想う気持ちを前面に出した表情で、気持ちを伝えてくれた。

二人は、これからも僕の中にいて、ずっと見守ってくれる。

それはとても心強い事実だ。

「父さん、母さん、ありがとう。……いつてきます！」

「いつてらっしゃい」

最後に笑いながらそう言い合っていると、父さんと母さんはその空間と共に光の粒子（ひかりのつぶし）となって消えていった。

さようならは言わない。

死んでからまた会って話すことが出来たんだ。

いつか、また会えることだっただけだと思おう。

そうしたら、今度は迷わずに最初に言おう。
ただいま、と。

*

「両親との再会はどうでしたか？」

後ろから声が出たので振り返ると、そこにはフォルティが立っていた。

「……その表情を見る限り、とても有意義な時間だったみたいですね」

「……うん、かけがえない時間になったよ。ありがとう、フォルティ。あ、協力してくれた神様にも、僕がお礼を言ってたって伝えてほしいな」

「ふふっ、分かりました。必ず伝えますね」

出来れば、直接お礼を言いたいところだけど、会えないものはしょうがない。

彼女ならしっかり伝えてくれると思うしね。

「それで、母さん達と話してて、ちょっと気になることがあったんだけど……」

「はい、なんででしょうか？」

「このあと、僕ってどうなるの？」

父さんも母さんも何やら意味深なことを言っていたけどどうなるんだろう？

そう思ってしまった質問に、フォルティが答えてくれる。

「しっかりと説明させてもらいます。あなたが両親と会う前に話すか迷ったのですが、一時間という短い時間だったので、教えることで本来話したかったことが話せなくなるかもしれないと思い、後回しにさせていただいたんです」

「なるほど。たしかにその方がよかったと思う」

「ならよかったです。それですね、匠真さんには、選択肢が二つあります」

「二つ？」

「そうです。一つ目は、地球とは別の世界に転生して、新たな人生を歩んでもらうことです。転生といっても、記憶は残りますし、すかた姿形もそのままなので、転生というより転移に近いかもしれませんが」

おお、これってアレだ！ 異世界転生ってやつだ！

ラノベでよくあったやつ。

「匠真さん、生前にそのような題材の物語をよく読まれていましたよね。イメージとしてはそれにかなり近いです」

「ちよっと待って。なんで知ってるの？」

「見てきましたから。お父様、お母様も見てましたよ」

マジか……たしかに僕のことを見守っていたとは言っていたけど、そんなところまで見られていたの!?

……プライバシーとは一体?

なんとなくそれ以上突っ込んだらやぶ蛇へびな気がするので話を逸らし、二つ目の選択肢を聞くことにした。

「……もう一つは?」

「もう一つは、匠真さんに我々と同じ神になっていただくという選択肢です」

「転生でお願ひします」

即答した。

するとフォルティは怒るでもなく、クスツと笑って「断られると思っていました」と言う。

僕が神なんて、悪い冗談じょうたんだ。

そんな資格、僕にあるわけがない。

「一応、理由があつてですね? 匠真さんの心——厳密に言えば魂は、神として求められるものをしつかりと満たしているんです。それ故に神に相応ふさわしいと私と私以外の最高神達が判断したんですよ」

「そもそも、そんなに簡単に神になれるもんなの?」

「いえいえ、決して簡単ではないんですよ? 死んでしまった人の魂の転生先は、生前の行いを考慮こうりして決めます。その時に神に相応しいと判断されたら神になれるわけですが……私が憶えている限りだと、神になった人間は神々の歴史の中でも、両手の指で数えられるくらいいしかいなかったよな」

神々の歴史で。

いくらなんでもスケールが壮大すぎる。

「……自分がそんな大層な人間だなんて、思えないけど」

「ふふ、匠真さんがそう思つてなくてもいいんです。大事なのは周りがどう感じるかですから」

……そういうものだろうか。

自分が素晴らしい人間だと言われて、はいそうですかと受け入れられる程、僕は素直すなおじゃない。むしろ、小心者だつて評価された方がしつくりくる。

神からの高い評価に応えられる人間じゃないって思っているから、さっきの言葉を聞いて嬉しいより怖い勝つもの。

「まあ、改めて言うけど、神様になるっていうのは遠慮するよ」

「そうですか。匠真さんが同じ神になってくれたら少し楽しそうだと思つたんですけどね」

フォルティはそう言つて悪戯いたづらっぽく笑う。
断られると思つてたみたいだ。

「そうなると、転生ですね。匠真さんの転生先は匠真さんが楽しんで暮らせるようにこちらで選びました。転生予定の世界は魔法やステータス、スキルがあつて、人は自分の職業を活かして、冒険したり、何かを生み出したりして生活しています。匠真さんが好きそうな世界を選んだのですけれど、どうでしょうか？」

なんだ、その夢の世界は。

どうしよう、話を聞いていて、めちゃくちゃ楽しみになつている自分がいる。

だつて、ラノベの世界観が好きで憧れていた僕にとつて、天国じゃないか。

「うん。とても楽しそうな世界だね。ちよつと楽しみになつてきたよ！」

「ふふっ、そうですね。それは選んだ甲斐があつたというものです。この転生は匠真さんの人生を壊してしまつた謝罪の意味を込めているので、なるべく楽しんでほしいし、何より幸せになつてほしいんです。あ、もちろん、匠真さんの不幸体質は改善した上で転生させるので安心してくださう」

それを聞いて安心した。

またあの不幸体質に悩まされるのは勘弁かんべんしてほしいからね。

「それで、転生してしたいこととか、こういう職業が欲しいとか、希望はありますか？」

そうだな………したいことが出来るなら、ずっと憧れていたものがある。

「フォルティも知っているかもしれないけど、僕の父さんは鍛冶師だつたんだ。僕もそれに憧れていたから、父さんが生きていたら仕事を教えてもらいたいって思つてた。だから、転生したら色々なものを作れるようになりたいかな」

「なるほど………いいと思います！ じゃあ、匠真さんの職業は色々なものを作る職業にしましょう」

「ちなみにどんなものが作れるの？」

「それは向こうに行つた時のお楽しみということぞ！」

まあ、たしかに全部分かつた状態で転生しても、面白くないか。

「分かつたよ」

「それで、他に希望はありますか？」

「希望ではないんだけど、質問してもいい？ 魔法つて、使う必要があるの？ 戦わないといけな理由でもあるの？」

「もちろん戦わなくても生きてはいけますよ？ ただ、向こうの世界には魔物という危険な生物がいて、それを討伐することで生計を立てている者もいます」

ますますファンタジーの世界だな。

そんな生物がいるとなると、多少は戦えないとダメだよなあ……

「あ、そうだ。ちなみに、職業は複数持つことも可能です。ファンタジー作品が好きな匠真さんならご存じかもしれませんが、この場合の職業はあちらの世界での意味とは少し異なります。それを持つていることで、高い能力を発揮出来るようになる役職ジョブのようなものだと考えてください。ですが、沢山の職業を持つているからといって、必ず能力が上がるわけではありません。その職業がどのようなものかを理解し、使いこなすことが何よりも重要なんです」

「なるほど……多い人でどのくらいの職業を持つているの？」

「五個くらいですかね？ ただそれぐらい職業を沢山持つているとバレルと、軽い騒ぎになるでしょうね。それが有用な職業であれば特に」

「んー、あまり目立ちたくはないかな……」

「ちなみにフォルティ」

「はい？ なんでしよう？」

「僕にも魔法って使える？」

「はい、もちろんです！ ふふっ、匠真さんも男の子なんです。魔法適性が高くなる職業もつけますか？」

「ちよつと懂れているのは否定しないよ……そうだね、出来れば使ってみたいな」

男の子は魔法とかに懂れを抱いちゃうんです。

「じゃあ、魔法が使えるようになる職業も追加しますね。他にも何か希望はありますか？ 遠慮し

ないでどんどん言ってください！」

「いやいや、結構わがまま言ったつもりなだけけど？」

「こんなもんじゃ全然、お詫びになつてませんよ！ ほら、他にも何かないですか？」

そう食い気味にフォルティが聞いてくる。

「うーん、他に何かあるかな？」

「向こうでの強さって、やっぱり職業の強さとかによって決まるの？」

「職業自体の強さというより、それらのレベルの高さですね。一見見えなさそうなスキルでも、使いこなせば凄い力を発揮出来ますから」

「んー、もうちよつと具体的に聞きたいな」

「ちよつと長くなりますよ？」

「大丈夫、むしろよく知らないことで後悔したくないし」

「分かりました。たとえば魔法使いという職業を、レベル1までしか育てていない人がいるとします。その人は職業スキルとして火魔法、風魔法、水魔法などのスキルをスキルレベル1の威力では